「台風の目」と ojo del huracán：日西比較研究
――〈目〉の意義特徴との関わり――

三　好　準之助

要　約

本稿は日本語の「目」とスペイン語の ojo との，多義構造を比較する対照研究の一部である。概念〈台風の目〉に対応する両言語の慣用句である「台風の目」と ojo del huracán について，その成立事情を概観し，両者を比較して判明した，以下の点について報告するものである。
(1)〈台風の目〉の対応語について：日本においてもスペインにおいても，20 世紀に入る頃，気象学の分野で〈台風の目〉という概念が一般的に公表された。そして専門用語として，日本では「台風眼」が，スペインでは ojo de la tempestad が使われるようになった。その後，20 世紀の 70 年代から一般語として，日本では「台風の目」が，スペインでは ojo del huracán が使われるようになった。
(2) 専門用語について：日本語の気象学用語である「台風眼」に関しては，外国語（英語）の専門用語からの訳語である可能性が高い。スペイン語では，18 世紀の用例である abrir ojo「目を開く」にしろ 20 世紀初頭に記録されている ojo de la tempestad にしろ，専門用語の一種（水夫用語）である。
(3)〈目〉の基本義の意義特徴と対応語の意義特徴について：日本語の場合，「目」が含んでいる〈点状のもの〉という意義特徴と「台風の目」が結びつけられている可能性がある。しかし「目」に〈中心を占める〉という意義特徴を設定してその用例に「台風の目」を持ってくる解釈には説得力がない。この意義特徴は「台風の目」のものであろう。スペイン語の場合も ojo の基本義のなかに〈parte central 中心部分〉という位置の意義特徴を設定してその用例として ojo del huracán（あるいはそれに相当する語句）を加えている辞書もあるが，日本語の場合と同様，この意義特徴は ojo のものではなくて ojo del huracán のものであろう。スペイン語の場合，この慣用句の成立には，ojo の基本義のなかの〈発光体〉というような機能が関与していると仮定することができる。

キーワード：目，ojo，台風の目，ojo del huracán，意義特徴

目　次

1. 日本語「台風の目」について
   1.1. 国語辞書における「台風の目」の扱い
   1.2. 日本語「目」の基本義の形状と位置の意義特徴
   1.3. 用例としての「台風の目」
   1.4. Eye と「台風の目」：専門用語の観点から
2. スペイン語 ojo del huracán について
   2.1.〈台風の目〉に相当する語句に関する辞書の情報
   2.2. CORDE での調査：専門用語と一般語
   2.3. CREA での調査：一般語として
   2.4. ojo del huracán の ojo について
3.〈台風の目〉の対応語の日西比較検討

3.1. 〈台風の目〉の対応語について
3.2. 専門用語について
3.3. 〈目〉の基本義の意義特徴と対応語の意義特徴について
4. むすびにかえて

現代日本語では「台風の目（眼）」という表現が使われている。他方，現代スペインの標準語では ojo del huracán という表現が使われている。両者に対応する概念は〈台風の目〉である。両言語の国語辞書ではこれらの慣用句が，視覚器官である〈目〉の対応語（「目」と ojo）とどのように関わっていると解釈されているのであろうか。

筆者は 2007 年 10 月に清泉女子大学で開催された日本イスパニヤ学会の第 53 回大会で「多義語『目』と ‘ojo’ の日西対照研究」という題名の口頭発表をした。その内容は多少修正して，日本イスパニヤ学会の雑誌「イスパニカ」の第 53 号（2009b）に掲載された。この論文は「多義語の対照研究」によってどのような知見が得られるかを報告する，という当初の目的はほぼ達成されていたが，細部にわたる情報の提示に欠けるところや，意味拡張の仕組みに関する解釈の不徹底な部分があった。本稿では，それらの点を補いつつ，スペイン語の慣用句である ojo del huracán で使われている ojo の意味拡張に関する新たな見解について報告したい。他方，概念である〈台風の目〉に関して日本語でもその対応語たる「台風の目」が使われている。本稿ではこれらの慣用句について，その成立過程や視覚器官の〈目〉との関連について，日本語とスペイン語を分けて検討し，最後にそれらの使い方について比較し，その類似点と相違点を探ろうとするものである。

1. 日本語「台風の目」について

まず，日本語の表現である「台風の目」について調べてみよう。

1.1. 国語辞書における「台風の目」の扱い

現代日本語の数冊の辞書を調べ，見出し語「目」と慣用句「台風の目」の関わり方を明らかにしてみよう。この慣用句は辞書のなかで次のように扱われている。

1.1.1.「目」の形状に注目する辞書

「新明解」[1] と「岩波国語」では見出し語「目」の記述のなかで視覚器官の形状の意義特徴が提示され，それとの類似によって「台風の目」という慣用句が使われているとしている。

「新明解」では，見出し語「目」の語義（二）①として「［視覚器官である目］に似た形のも

の」が挙げられ, その用例のひとつとして「台風の目」が紹介されている。そして見出し語「台風」の記述のなかに子見出しとして「台風の目」が紹介され，その意味が解説されている。

「岩波国語」では, 見出し語「目」の（一）④に語義「形が［視覚器官の目］に似ているもの」が挙げられ，その用例として「台風の目」が紹介されている。そして見出し語「台風」の記述のなかに「台風の目」が紹介されて解説されている[2)]。

1.1.2. 見出し語「目」に〈中心を占める〉という意義特徴を設定する辞書

「大辞林」,「明鏡」,「日国」が，見出し語「目」のなかにこのような意義特徴を設定して「台風の目」に言及している。そして「広辞苑」では少しニュアンスが異なるものの,〈動きの中心にあるもの〉という意義特徴を設定している。

「大辞林」では，見出し語「目」の名詞としての語義記述の第 1 語義が〈視覚器官〉であり，第 2 語義が「［視覚器官の目］に似たもの，たとえられるもの」だが，その下位語義の（5）に「物の中心部にあいた穴状の個所」が挙げられ, その用例に「台風の目」が加えられている。この語義には 2 種類の意義特徴が加わっている。位置の概念としての〈中心部を占める〉と, 形状の概念としての〈穴状〉である。そして見出し語「台風」では子見出しとして「台風の目」が挙げられ, 2 種類の解説が加えられている。ひとつは気象学的な説明で, その末部に同義語としての「台風眼」が付記されている。もうひとつは「台風の目」の拡張語義の「激動する物事の中心にいて，影響を与えている勢力や人物」である。

「明鏡」では，見出し語「目」の名詞の語義の 6 番目に〈中心にあるもの〉が挙げられ，その用例として「台風の目」が加えられている。そして見出し語「台風」では「台風の目」に言及されていない。

「日国」では見出し語「目」の名詞の語義の 4 番目が〈位置，形状，価値などが［視覚器官の目］に似ている物事をいう〉であるが, その下位語義の（1）が〈事柄の中心となる点。または主要な点〉とあり，またその下位語義の 2 番目が〈物の中心。中心にある穴など〉という概念になっていて，その用例に「台風の目」が提示されている。そして親見出し「台風」のなかの子見出しとして「台風の目」が紹介され，解説と用例が示されている。

さらに,「広辞苑」では見出し語「め（目・眼)」の名詞の第 1 語義「視覚器官」の下位区分の 4 番目が「動きの中心にあるもの。『台風の―』『騒動の―』」[3)] となっており, 見出し語「台風」の子見出し「台風の眼」には気象学的な解説のほかに「転じて，激しく動いている事物の中心となる勢力や人物」という解説が加えられている。

1.1.3. 見出し語「台風」でのみ「台風の目」に言及する辞書

「言林」では見出し語「目」の記述で「台風の目」への言及がなく，この慣用句は見出し語「台風」の子見出しとしてしか出ていない。

さらに，その他の辞書で見出し語「目」に「台風の目」を用例として含んでいるものを“「中心＋穴」（「日国」，「大辞林」）”のように簡略な意義特徴と辞書の略語であげれば，「中心＋目の形」（「学研国語」，「例解新国語」，「旺文社国語」），「目の形」（「集英社国語」），「位置や形が目に似ているもの」（「講談社日本語」，「現代国語」）などがある[4)]。

日本語の辞書のなかで行われている慣用句「台風の目」の扱いは，これらの辞書に関する限り，3 種類にわかれていることが判明した。この慣用句については現代日本語のなかに位置づける方法が統一されていない，すなわち客観的に広く認知された扱い方が存在していないと言えよう。

1.2. 日本語「目」の基本義の形状と位置の意義特徴

上記 1.1.1. と 1.1.2. に関連して，日本語の「目」の基本義が内包していると思われる形状と位置の意義特徴を探ってみよう。

1.2.1. 点状

たとえば「大辞林」では，見出し語「目」の名詞の語義について，大分類 2 に，「1［視覚器官］に似たもの，たとえられるもの」という意味特徴に関連する語義が並べてある。その下位区分①が「点状のもの」であり，用例は「さいころのめ」である。「日国」でも同様で，名詞の語義の 4 番目の分類項目が「位置，形状，価値などが［視覚器官］に似ている物事をいう」とあり，その下位区分②が「目，特に眼球を思わせる形状のもの」とあって，その下位区分のイが「双六（すごろく）などに用いる賽（さい）の面につけられた，一から六までの点」となっている。また，「岩波国語」（第 6 版）では，上位区分の意義特徴のひとつに「［視覚器官］と形が似ているもの」という概念があって，その下位区分の 3 番目が「さいころの面につけた点状のしるし」となっている。しかしながら「広辞苑」（第 6 版）などのように「点状のもの」という意義特徴と「目に似た形のもの」を分けて扱っているものもある。

「目」の「形状」の意義特徴の概念が「点状」であると受け止められているとすれば，「（さいころの）目」という用例は「目」との形状の類似から隠喩で拡張した語義であるということになる。そしてほかのいくつかの語義も同様の隠喩によって拡張していることが分かる。「大辞林」の記述なら，「（碁盤の）目」のような「線状のものの交わった箇所」，「（網の）目」や「目（のあらい布）」として使われる「縦横に交わった線によって囲まれた部分」なども参考になろう。拡張義からの推論で，「目」の基本義には「点状」という形状の意義特徴があることがわかる[5)]。

1.2.2. 線状の隙間

さまざまな辞書の記述を比べてみると，日本語「目」の基本義のなかの形状の意義特徴のなか

には「線状の隙間」というような概念も含まれると解釈することが可能になる。たとえば「岩波国語」（第 6 版）では，名詞の語義分類の 4 番目が「形が［視覚器官］に似ているもの」であるが，その下位区分の（イ）が「縦に並んだものの，すき間」であり，用例は「のこぎりの目」「櫛（くし）の目」である。日本語では視覚器官である「目」が細い「線状の隙間」という形として認知されていることになる。

この形状は，「目」ということばの古い使い方を調べれば，たとえば「旺文社古語」の見出し語「目」の第 6 語義は「物のすき間。穴。また，物のふちとふちが合う所」[6] となっているし，浮世絵では人物像の目が「線状のすき間」のように描かれているからには，伝統的な認知方法なのであろう。〈目尻が細長く切れ込んでいる目〉が古くから「切れ長の目」と呼ばれてプラスの評価を受けていたことからも推察されるように，目の形状は上下のまぶたがすき間を作るかのように接近している形で認知されていたようである[7]。

そしてこの線的な形状から，それとの類似関係（隠喩）を手掛かりにして「連続する，物と物との隙間（すきま）。間の区切り。区切りをつける線条。また，そのように刻まれたもの」（「日国」名詞用法の第 5 語義）へと意味が拡張したが，さらにこの語義から接尾辞としての用法が成立している[8]。

1.2.3. 位置の意義特徴

現代語の国語辞書を調べてみると，そのいくつかで見出し語「目」の語義として〈中心を占める〉という概念が示されている。上記 1.1.2. で言及された辞書である。「大辞林」なら「物の中心部にあいた穴状の箇所。『台風の―』」とある。「日国」では名詞の語義の 4 番目が「位置，形状，価値などが［視覚器官］に似ている物事をいう」とあり，その下位区分の 2 番目（ロ）に「物の中心。中心にある穴など。『台風の目』」とある。さらに「明鏡」も同様であった。「広辞苑」では意義特徴に少し異なったニュアンスが含まれているが大筋では〈中心を占める〉という概念に相当しよう。ここでは「目」の位置の意義特徴が問題となるが，これらの語義では用例がともに「台風の目」である。しかし，その他の国語辞典を調べても，このような位置の意義特徴に言及しているものは見つけることができなかった。

1.3. 用例としての「台風の目」

他方，「台風の目」という表現は，いつごろから辞書の記述に現れてくるのであろうか。2 種類の国語辞書でその変遷をたどってみよう。

1.3.1. 「岩波国語」

この辞書は初版の出版が 1963 年で，その後，1971 年，1979 年，1986 年，1994 年，2000 年と版を重ねている。「台風の目」は，初版では見出し語「目」の記述にも見出し語「台風」にも出

ていない。その状態が続くが，第 5 版（1994）では，両方の見出し語に現れ，第 6 版がそれにならう。

1.3.2.「広辞苑」

上記 1.1.2. のなかで紹介した「広辞苑」では，どのようになっているのであろうか。初版が 1955 年の出版で，以降の版は 1969 年，1983 年，1991 年，1998 年，2008 年に発行されている。「台風の目」が見出し語「目」に含まれるのは第 4 版（1991）からであるが，見出し語「台風」には興味深い記述がある。初版ではその子見出しとして「台風眼」が気象学的に説明されている。そして第 2 版（1969）ではその子見出しが「台風の眼」になり，その解説の最後に同義語として「台風眼」が紹介されている。第 3 版も同様。そして第 4 版（1991）では，見出し語「目」の名詞の第 1 語義「視覚器官」の下位区分の 4 番目が「動きの中心にあるもの。『台風の―』『騒動の―』」となっており，見出し語「台風」の子見出し「台風の眼」には気象学的な解説のほかに「転じて，激しく動いている事物の中心となる勢力や人物」という解説が加えられている。そして第 5 版，第 6 版も同様である。

1.4. Eye と「台風の目」：専門用語の観点から

「広辞苑」の 1955 年版に「台風眼」が姿を見せた。現在では「大辞林」で見出し語になっている。この漢語的表現の存在から，「台風の目」はもともと気象学の術語であって，英語 eye of the storm（typhoon）に対応する翻訳語（「台風眼」）が和語風に改変されたのではないか，という疑念が生まれた。気象観測技術の先進国である英語圏の事情を探ってみよう。

1.4.1. 英語 eye の意義特徴

英語の辞書を調べてみると，‘eye’ の基本義（視覚器官）のなかに〈中心部に位置する〉という意義特徴が含まれていることがわかる。たとえば ODE では見出し語 eye の 2 番目の語義が〈とくに外観や形や相対的位置が目に似ている物〉であり，そこに具体例として〈とくに色がはっきり区別できる，花の中心部〉と “（also **eye of the storm** or **eye of the hurricane**）the calm region at the centre of a storm or hurricane” が挙げられている。また，Stein には〈光，思考力，影響力などの中心〉，〈標的の中心〉（= ‘bull’s-eye’「金的」[9]）という語義（11 番と 14 番）が提示されている。さらに OED ではその 19 番目の語義が “The center of revolution”〈渦巻きの中心〉であり，用例から判断すると既に 19 世紀の末ごろには船乗りたちの用語で「台風の目」に当たるところが “eye of the storm” と呼ばれていたことが分かる。すなわち，英語では，eye の「（台風の）目」という語義への拡張は〈中心を占めるもの〉という意義特徴から成立したと判断することができる[10]。この気象は英語圏で，少なくとも 19 世紀末ごろには eye と呼ばれていたことがわかった。

1.4.2. eye of the storm から「暴風眼」へ

饒村（107）によると,「台風眼の詳しい気象資料が初めて得られ」たのは 1882 年のマニラ台風の時であり，その結果を「岡田武松（第 4 代中央気象台長），バルー（米）等多くの学者が研究資料として使っている」という。岡田武松は 1874 年生まれの気象学者で，1923 年から 1941 年まで中央気象台長であった。1922 年に eye of the storm（標題の和訳は「台風眼に就て」）に関する論文を発表していて，そこではバルーの eye of the storm に関する先行研究（1892）が引用されている[11)]。また，岡田（1908：26）では一番強い風が「颶風」と呼ばれて定義されており，岡田（1913：91）では「颶風眼」についての，岡田（1916：100）では eye of the storm の直訳と思われる「暴風眼」についての解説がある。岡田（1935:13）では「颶風」と「颱風」が混用されているものの「颶風眼」について説明されている[12)]。この流れから見ると,「台風眼」は英語の用語から「翻訳された」（いわゆる Loan translation「翻訳借用，スペイン語なら calco「（外国語からの）引き写し」）ということに関しては，直接的な証拠は見つからないものの，そうである可能性が十分にあると思われる。

1.4.3.「台風眼」から「台風の目」へ：専門用語から一般語へ

「台風眼」,「台風の眼」,「台風の目」の使用頻度について「読売新聞 B」を調べたところ, 1936 年までは三者とも使われていないが，37 - 45 年には「台風眼」が 4 件，そして 46 - 60 年では「台風眼」が 3 件,「台風の眼」が 9 件,「台風の目」が 17 件出ている。しかし 61 - 70 年では「台風眼」と「台風の眼」がともに 2 件だが「台風の目」は 32 件も出ている。この頃から「台風の目」の姿を, 気象観測衛星からの写真で一般的に見ることが可能になった[13)]。「台風眼」は気象用語として使い続けられようが[14)]，一般語としては「台風の眼」から「台風の目」に移行してきたと思われる。あくまで可能性の問題である。

他方,〈台風の目〉の映像が気象観測衛星から送られ，一般紙面で小さな写真で提供されるとき，写真によっては，渦巻く雲が白く映し出され，その中心に黒い点状の〈台風の目〉が写っていることがある。その形状が「サイコロの目」と十分に類似している場合,「目」の形状の意義特徴のひとつとの類似関係によって隠喩で「台風の目」という表現が生まれた可能性を否定することはできない。とはいえ，筆者の能力ではこの可能性の正当性なり不当性なりを証明することはできない。

2. スペイン語 ojo del huracán について

第 2 章ではスペイン語における〈台風の目〉の対応語について検討してみよう。三好（2009b: 51-2）では慣用句 ojo del huracán について以下のように述べておいた。

スペインでも〈台風の目〉という概念は近代的な気象観測が可能になってから導入されたはずであるし，スペインがここ 150 年ほどの間にハリケーン（huracán）を経験したのはたった 9 回であるという。台風（ハリケーン）自体が馴染みの薄い現象であろう。この意味を ‘eye’ の語義のひとつとして登録している辞書は「アギラル」（3280）と「クラベ」（1150）であった。「アカデミア」（1095），「モリネル」（493），「ラルース」（1215）は ‘ojo’ の熟語のひとつとして ojo del huracán を記載している。そしてこの熟語さえ，20 世紀の前半のスペインでは使われていなかった可能性が大きい。なぜならば，この語句は，1900 年以降の CORDE では検索できないからである。1975 年以降の言語コーパスである CREA では 67 件出てくるが，その場合も大半の用例が気象用語としてではなく，拡張義である “Centro de una situación polémica o conflictiva”（DRAE［「アカデミア」］）の意味で使用されている。

さまざまな拡張義から判断すると，‘ojo’ の基本義の中に〈中心にあるもの〉という意義特徴はなさそうであるが，その形状としては基本的に「貫通している穴」であるし，語義 8）「パンやチーズの穴」，9）「油の玉」，11）「平地の湧き水」を考慮すればその形が円形であることから，「台風の目」の姿が ‘ojo’ と呼ばれても，形状に関するスペイン語内の意味の体系的概念と矛盾するところはないと判断することができる。

この見解には修正すべき点が，少なくとも 2 ヶ所ある。ひとつは，〈台風の目〉という概念は，おそらく一般社会では「近代的な気象観測が可能になってから導入された」であろうが，スペインの船乗りたち（専門家集団）の間では，すでに 20 世紀に入ったころには馴染みのある気象であった，という点である。スペイン語の辞書で見出し語 ojo の記述を再検討する過程でこの事実に遭遇した。ふたつめは，その意味拡張を可能にした意義特徴は，どうやら「形状」ではなさそうだ，という点である。以下でその新たな解釈に至った道筋の概略を紹介しよう。

数種類のスペイン語辞典および CORDE と CREA で調べてみると，〈台風の目〉に相当する語句には 3 種類あることが判明した。ojo del huracán, ojo de la tempestad, ojo de la tormenta である。それぞれの語句の使用について把握できた情報は以下の如くである。

2.1.〈台風の目〉に相当する語句に関する辞書の情報

スペインの現代語辞書で見つけられたのは ojo del huracán と ojo de la tempestad という 2 種類の語句であった。

2.1.1. 親見出し ojo の語義に加えられている ojo del huracán

第 2 章の初めに紹介した三好（2009b）からの引用部分で明らかなように，この慣用句を ojo の語義のひとつとしてその定義を加えている辞書に，「アギラル」と「クラベ」がある。さらに Lucena Cayuela，J. I. Alonso もそうである。

「アギラル」の第 6 義：Área, gralm. circular, situada en el centro de un huracán o de una

tempestad. *Frec* EL ~ DEL HURACÁN.

「クラベ」の第 11 義：Parte central de algo, esp. de una tormenta o de un huracán.

Lucena Cayuela の第 7 義：Zona central de un huracán, donde la actividad es nula.

J. I. Alonso の 7 番目の語義：Núcleo o parte central de algo: *el ojo de un huracán*.

いずれも形状の語義は別に設定してあり, それとは別の語義である。共通する意義特徴は〈中心を占める〉である。

2.1.2. 見出し語 ojo の子見出しとして提示されている ojo del huracán

子見出しとしてこの慣用句を提示している辞書は「アカデミア」,「モリネル」,「ラルース」である。さらに「サラマンカ」もそうであった。

「アカデミア」:1. m. Rotura de las nubes que cubren la zona de calma que hay en el vórtice de un ciclón, por la cual suele verse el azul del cielo. 2. m. Centro de una situación polémica o conflictiva.

「モリネル」: 1 Centro de un ciclón en el que no hay nubes ni sopla el viento. 2 Figuradamente, momento de calma tensa en medio de una situación de agitación.

「ラルース」: Parte central de esta tempestad violenta en la que todo está en calma.

「サラマンカ」: 1 METEOR. Parte central de un huracán. 2 INTENSIFICADOR. Centro de una situación polémica o conflictiva.

「ラルース」以外の 3 者は拡張義も加えている。

さらに,「アカデミア」(22 版, 2001) の場合, 旧版である 21 版 (1992) までは見出し語 ojo のなかにこの表現が含まれておらず, それまでの版で子見出しとして記載されているのは ojo de la tempestad だけである。

2.1.3. ojo de la tempestad

この語句は「アカデミア」, M. Alonso, Alvar の見出し語 ojo の記述のなかに子見出しとして含まれている。

「アカデミア」: ojo de la tempestad 1. m. ojo del huracán.

M. Alonso：O. de la tempestad. Rotura de las nubes que cubren el vórtice de los ciclones por la cual suele verse el azul del cielo.

Alvar：*ojo de la tempestad*, rotura de las nubes que cubren la zona de calma que hay en el vórtice de un ciclón, por la cual suele verse el azul del cielo.

「アカデミア」ではこの語句が ojo del huracán と同義であるとしている。そして後 2 者には ojo del huracán が子見出しとしても含まれていない。

なお,「アカデミア」がこの語句を子見出しとして記載したのは 1925 年の 15 版からであり, その時の記述は上記の ojo del huracán のものと似ているが少し異なり, Rotura de las nubes que

cubren el vórtice de los ciclones, por la cual suele verse el azul del cielo である。

2.2. CORDE での調査：専門用語と一般語

上記の 2 種類の語句をこの言語コーパスで調べたところ, 以下のことが判明した。CORDE は 1975 年までのスペイン語圏のスペイン語データバンクである。

2.2.1. ojo del huracán：一般語か

まず huracán だけであるが，この単語はスペインで 1900 年から 1975 年までの資料に 196 回使われていた。しかしこの中に ojo del huracán という表現は一度も現われていない。上記のように現代語の辞書では当然のようにこの語句が採用されているが，CORDE に関する限り，1 例も現われていないのであるから，その使用は比較的新しいと判断される。一般語として使われ始めたのであろう。

ただ，興味深いことに，その同義語と判断される centro del huracán という語句が 1 度現われている。115 番目の用例であり，1900 年に Madrid と Barcelona で出版された Augusto Arcimis の著書である *Meteorología*（『気象学』）のなか（176 頁）にある [15)]。ということは, 20 世紀の初頭には専門用語としても一般語としても ojo del huracán という表現が使われていなかったのであろう。

2.2.2. ojo de la tempestad：専門用語か

2.1.3. で紹介したように 3 種類の辞書に採用されているこの語句は，CORDE のスペインのコーパスには 1 例しか出てこない。しかもそれは上記の 1900 年に出版された Augusto Arcimis の『気象学』に含まれている（上記と同じ 176-7 頁）。そのほかには見つからなかった。この 1 例の含まれている文脈の前後には貴重な情報も含まれているので以下に紹介しておこう。

> pues todas las borrascas tropicales presentan como característica distintiva, una inmensa nube negra, de la que se escapan, no gotas de lluvia, sino placas de agua. Esta nube es enorme y de gran altura, tal vez de 8,000 metros, pues en ocasiones se ha distinguido su vértice en el mar, desde 90 leguas de distancia; de tal modo intercepta la nube la luz del Sol, y la obscuridad en pleno día es tan intensa, que el cielo y el mar ofrecen el mismo color y se confunden, los relámpagos y los truenos no cesan un instante; cuando el centro del ciclón pasa por el lugar del observador, se nota, a veces, que la nube, negra se adelgaza y abre, dejando ver, por breve tiempo, el azul del cielo; a este fenómeno dieron los navegantes españoles el nombre de *ojo de la tempestad*. Pasado el período de calma, cuya duración es variable, vuelve a soplar el viento con la misma furia que antes, pero en sentido diametralmente opuesto, hasta que, alejándose el vórtice gradualmente recobra la atmósfera su anterior estado de tranquilidad.

すなわち，熱帯性低気圧の暴風雨が接近して空が真っ暗になり水面と雲の境もわからなくなるが，その中心に入ると異常な静けさが訪れ，空の青い色もみえる。しかししばらくすると，今度は反対方向から以前と同じような暴風雨が訪れるが，それも通過すると，時化に合う前のような静けさになる，という。この引用文からは〈台風の目〉という気象の様子がよく理解されていることがわかるし，スペインの船乗りたちは（20 世紀に入る頃には既に）水夫用語としてこの種の暴風雨圏の中心地帯を ojo と呼んでいたこともわかる。

2.3. CREA での調査：一般語として

よく知られているように，このコーパスは 1975 年以降の現代スペイン語のものであり，スペイン語圏の多くの国の資料を含んでいる。このデータバンクで問題の語句の使用状況を改めて調べてみた。

2.3.1. ojo del huracán

まず huracán という語の使用であるが，この語形を分野などは制限なしでスペインに限って検索すると，274 例が含まれている。そして ojo del huracán という慣用句は 65 回[16] 現われている。また定冠詞が el ではない場合の用例を数えると 77 例あるが，そのほとんどは気象に関係のない表現である[17]。なお，〈台風の目〉の意味の ojo が huracán の代名詞と一緒に使われているのが 1 例あった[18]。

ojo del huracán の使用に関する年代的な特徴であるが，この慣用句が気象学上の意味であれ「アカデミア」が示す拡張語義である “Centro de una situación polémica o conflictiva” の意味であれ，このデータバンクのなかの最古の用例は 1989 年の新聞記事（ABC, 15/06/1989）であった。CREA に関する限り，この慣用句はスペインで 20 年ほど前から使われだしたものと推測される。

2.3.2. ojo de la tempestad

この語句は CREA のコーパスには 1 件も含まれていない。この語句を「慣用句」として扱うことは言語使用の実態に反していると思われる。CORDE でも上記の Augusto Arcimis の 1 件しか現れないからでもある。しかし，かつては専門用語であったとしても，現在では専門用語として使われていることも疑わしい[19]。

2.3.3. ojo de la tormenta

語義の観点から ojo del huracán と類似の表現である語句として ojo de la tormenta が考えられる。この語句は，筆者が参照したスペインの国語辞書には見当たらないし，言語コーパス CORDE にも含まれていなかった。しかし CREA で調べてみると，スペイン語圏のデータとして 28 件の用例が含まれていたが，そこにはスペインでの用例が 1 件もない。すべてがスペイン系アメリ

カでの使用例であった[20]。そして〈台風の目〉の意味で使用されているのはベネズエラの新聞（El Universal, 09/07/1996）の 1 例だけであり，残りの用例は「アカデミア」が ojo del huracán の拡張義として紹介している意味（c.f. 2.3.1.）で使用されている[21]。

2.4. ojo del huracán の ojo について

スペインの現代スペイン語で使われている慣用句の ojo del huracán について，三好（2009b: 52）では〈台風の目〉の形状に注目し，それが ojo の形状の意義特徴である〈穴状の隙間〉を手掛かりにして，それほど無理もなく拡張した語義であろうと判断した。しかしその判断はこの慣用句全体の語義に引きつられることで誘導されたものであった。実際，筆者は，問題の意義特徴の語義のなかに ojo del huracán という用例が含まれている辞書には出会っていない。そこで ojo について再検討した結果，以下の情報を得ることができた。

2.4.1. OED の貴重な情報

日本語の慣用句である「台風の目」の出自を検討したとき（1.4.），日本語の「目」の形状の意義特徴として〈中心を占める〉も〈円形〉も見当たらないし（1.2.），そもそも「暴風眼」という気象用語が使われていたということから，それが英語の eye of the storm の翻訳語であろうという当たりをつけて英語の辞書を調べた。そして OED の見出し語 eye, *n*[1] の 19 番目の語義の 3 番目の用例に注目した。eye of the storm という語句が含まれていたからである。しかしそのときは OED の問題の語義の最初の用例として挙げられている “1760-72 tr. *Juan & Ulloa's Voy.* (ed. 3) II. VIII. iii 210 The cloud... begins, according to the sailor's phrase, to open its eye, i.e. the cloud breaks, and the part of the horizon where it was formed becomes clear.” を見落としていた。じつはこの用例にこそ，スペイン語の ojo の基本義に含まれている大切な意義特徴を示唆する秘密がひそんでいたのである。

OED の文献表により，この翻訳本の原典はスペイン王室海軍の士官である Jorge Juan と Antonio de Ulloa が書いて（執筆の大半は後者）1748 年に Madrid で出版された *Relación histórica del viage a la América Meridional* であることがわかった。第 1 部 682 頁，第 2 部 603 頁，史的要約 195 頁の浩瀚な紀行書である。問題の個所は第 2 部の「リマからキトへの帰還」を扱う「第 2 の書」の，「カジャオ港からホアンフェルナンデス諸島への旅」を扱う第 3 章に現れている（272 頁）。海上で遭遇する「一時的な暴風雨，スコール」（turbonada）について，地平線に黒雲が湧きあがり雨も降るが “dentro de quatro, ò cinco minutos vuelve à quedar tan sereno el tiempo como antes: lo qual advierte la misma *Turbonada*, porque luego que acaba de formarse en el Horizonte, empieza à *abrir ojo*（que assi llaman los Prácticos）esto es que se rompe la Nube, y hace claridad por el mismo Horizonte, donde se formaba” ということである[22]。この描写から以下の点が判明する。

（1）著者はスペイン人である。二人はスペインの軍艦に乗ってカディスからパナマのカリブ海側の港ポルトベロに着くが，そこから陸路パナマ市に至り，そこで新たな船に乗って南アメリカの太平洋岸に沿って南下する。同行する船乗りたちは現地の人間であろう。

（2）abrir ojo の表現は水先案内人たち（prácticos）の言い方である。そして水先案内人は現地（現在のペルー）の船乗りであろう。

（3）空を覆っている黒雲の地平線上に切れ目ができてそこに空の明るさが見えるとき，彼らはその現象を abrir ojo「目を開く」と呼んでいた。

2.4.2. 雲の abrir ojo という言い方について

（la nube）abrir ojo という表現はペルーあたりで働く船乗りたちの言い方であるという。植民地と本国の間で船乗りたちの交流があったかどうかは，筆者には不明であるが，本国のスペイン語が使われる植民地の船乗りたちの間でこのような表現が使われていたということによって，スペイン語の ojo の基本義自体にその表現を可能にする意義特徴が含まれていたと推測することが可能になる。しかしここで引用されているのは単語としての ojo だけではなくて，abrir ojo「目を開く」という述語である。空を覆う黒雲によって視界が暗黒である状態のとき，地平線上に切れ目ができてくるという独特の気象を「目を開く」という行為になぞらえて表現しているのである。閉じている目を開く，すなわち，水平に閉じられていた瞼が開いてゆく，その変化を問題の雲の切れ目の出現と類似するものと認知することで生まれた表現であろう。同様の身体的行為に「口を開く」が考えられるが，水先案内人たちは問題の現象を見て，なぜ，「口」ではなくて「目」を連想したのであろうか。口は開いてもその中は暗い。では，水平線上にできた黒雲の切れ目から空の光りが差し込んでいるのを見て，なぜ「目」を連想したのであろうか。

さらに，20 世紀初頭にはスペインの船乗りたちも〈台風の目〉を ojo（de la tempestad）と呼んでいたことは，上記の Augusto Arcimis の記述から明らかになっている（2.2.2.）。この意味の拡張には ojo の基本義のなかの形状の意義特徴が関与しているのではなかろう。なぜならば，〈台風の目〉が円形であると認識することを可能にする気象観測衛星の写真は，まだ出現していないからである。しかし少なくとも，ojo を含んでいる暴風雨圏が tempestad であれ huracán であれ tormenta であれ，ojo と呼ばれた場所は〈空を覆う黒雲にできる切れ間で，そこから空の光が差し込み，昼間ならその青さもうかがうことができるところ〉を指している，ということは認められる。では，水平線上の黒雲の切れ目の表現に使われている ojo と〈台風の目〉という気象を表現する ojo に共通する意義特徴としては，どのような概念が考えられるのであろうか。

そこで筆者は，abrir ojo の ojo と ojo del huracán の ojo に共通する概念として〈青空が見える〉，すなわち光が差し込んでいる，という点に注目した。すなわち，ojo の基本義の意義特徴のなかに〈光を発する〉という概念が含まれていて，この特徴との類似関係（隠喩）によって問題の ojo の拡張義が成立したのだと推論するのである[23]。ojo の基本義のなかの機能の意義特

徴のひとつに〈光を発する，すなわち発光体である〉という概念が存在することになる。その可能性に関してであるが，スペイン系アメリカのスペイン語には〈目〉に〈発光体〉という意義特徴のあることを示唆する用法がある。Kany（29）は faroles「カンテラ」, linternas「ランタン」, lámparas「ランプ」が〈目〉の意味で広く使われていることを指摘しているし，Rosenblat（III, 272）も〈目への殴打〉が lamparazo とか linternazo と呼ばれていることを報告している。国別の辞書によれば，〈目〉の意味で使われている〈発光体〉としては，メキシコ（Gómez）とキューバ（Haensch, 2000b）で faroles と linternas が，チリ（Morales Pettorino）で faroles と lámparas が，ウルグァイ（Haensch, 1993）とアルゼンチン（Haensch, 2000a）で faroles が使われている。そしてスペインであるが，1991 年に出版された Manuel Martínez Mediero の劇作品 *Las largas vacaciones de Oliveira Salazar* には “Los ojos de SALAZAR son como dos faros en la noche”（pág. 83）という，直喩によって ojos = faros を暗示する表現も存在する [24]。

2.4.3. 発光体としての ojo

ojo の基本義に〈発光体〉という機能の意義特徴が含まれているとすると，ojo にかかわる，少なくとも以下の 2 種類の表現における意味拡張について，その成立のプロセスを推論することができる。

A. ojo de patio

この熟語表現は M. Alonso と「アカデミア」に見出し語 ojo の子見出しとして記載されている。後者では 2 種類の語義が提示されている。“1. m. Hueco sin techumbre comprendido entre las paredes o galerías que forman el patio. 2. m. Abertura superior por donde le entra la luz a este hueco y se ve el cielo.” である [25]。この表現の ojo は，中庭の上部にあって空に向かって開いている〈開口部〉のことであり，下から見れば四周の暗い壁面に囲まれた，明るく光が差す所である。単なる〈開口部〉ではなく，そこから光が差し込むところなのである。この表現が成りたつのは ojo に〈発光体〉という機能の意義特徴が含まれていることによるのであろう。Real Academia Española の辞書では 1884 年の 12 版から子見出しとして記載されている。とはいえ，この表現は CORDE でも CREA でも見つけることが出来なかった。古い表現なのであろうか。

B. ojo de jabón

スペイン語 ojo の用法を記述する「モリネル」の第 13 義である “*Cada aplicación de jabón a la ropa que se lava*: ‘Dar dos ojos de jabón’.” のことである。この拡張義に関する筆者の見解ついては，この語義についての辞書による説明のなかに mano と同義であるという指摘もあってその意味拡張の道筋が複雑であるので，別稿（Miyoshi 2009）で発表しておいた。別稿では，この拡張義も，ojo の基本義に〈発光体〉という機能の意義特徴が含まれていて，ojo の〈光を発して明るくする機能〉と石鹸の〈衣類の汚れを取ってきれいにする機能〉との間で認知される隠喩のメカニズムで成立した，と解釈できる可能性のあることを論じている。

3. 〈台風の目〉の対応語の日西比較検討

第 1 章と第 2 章で提出されているデータを比較すると，以下のような諸点が浮かび上がってくる。

3.1.〈台風の目〉の対応語について

日本においてもスペインにおいても，20 世紀に入る頃，気象学の分野で〈台風の目〉という概念が一般的に公表された。そして専門用語として，日本では「台風眼」が，スペインでは ojo de la tempestad が使われるようになった。前者は今日でも専門用語として使用されているが, 後者がそうであるかどうかは不明である（そうでない可能性もある）。そして 20 世紀の 70 年代以降，両国で一般語での対応語が使われ始めた。日本語では「台風の目」であり，スペイン語では ojo del huracán である。しかしながら，これらの一般語が使われだした時期には，気象観測衛星から〈台風の目〉の映像が送られてきて，縮小されたその姿が一般大衆の目に触れることが可能になった。そこで，これら一般語が成立するとき，それぞれの言語の〈目〉の対応語とどのような関わりがあったのかが，非常に重要なことになるものの，筆者の能力ではその関わりを深くは検証することができなかった。

とはいえ，本稿の 1.1.3. で見てきたように,「台風の目」については現代日本語のなかで「目」とどのように関連づけるかの解釈の方法が統一されていない，すなわち客観的に広く認知された扱い方が存在していないことだけは確かであろう。そしてスペイン語では本稿の 2.3. で見てきたように，3 種類の対応語の存在がうかがわれるが，現代スペインの一般語として使われるのは ojo del huracán だけであると解釈できる。

3.2. 専門用語について

日本語の気象学用語である「台風眼」に関しては, 外国語（英語）の専門用語からの訳語である可能性が高い。とはいえ，この専門用語と等価の一般語である「台風の目」が「台風眼」から発展した語形であるとしても，一般語（「台風の目」）における外国語の直接的な影響があったとは言えない。外国語から一段階（「台風眼」）を経て成立しているからである。

スペイン語では, 18 世紀の用例である abrir ojo にしろ 20 世紀初頭に記録されている ojo de la tempestad にしろ, 専門用語の一種（水夫用語）である。前者は水平線上に雲の切れ目ができる現象を「目を開ける」という表現で説明しているし，後者は暗黒の視界に出現する直径数十キロにもなる静穏域を指している。

3.3.〈目〉の基本義の意義特徴と対応語の意義特徴について

日本語の場合，辞書によっては「目」の基本義のなかの形状の意義特徴のひとつである〈点状のもの〉という概念と「台風の目」が結びつけられることがある。筆者はこの結び付きについては否定も肯定もできない。手元にそのための証拠が存在しないからである。その解釈の合理性は納得ができる。他方,「目」の基本義に〈中心を占める〉という意義特徴を設定してその用例に「台風の目」を持ってくる辞書もあるが，この設定には合理性がない。半世紀前には国語辞書に含まれていなかった意義特徴であるうえに，この意義特徴に対応する用例は「台風の目」だけだからである。どのような解釈をしても，この意義特徴は「目」の基本義に含まれているのではなくて,「台風の目」の基本義に含まれていることになる。

スペイン語の場合も日本語の事情に似ている。ojo の基本義には意義特徴のひとつに〈穴状のもの〉という概念があるので，一般語の ojo del huracán の成立にはこの意義特徴が関与しているかもしれない。しかしながら問題の形状の意義特徴の用例の中に ojo del huracán を含めている辞書は見当たらなかった。他方，スペインの国語辞書の中には ojo の基本義のなかに〈parte central 中心部分〉という位置の意義特徴を設定してその用例として ojo del huracán（あるいはそれに相当する語句）を加えているものがある[26)]。スペイン語 ojo の語義の記述をほかの何冊かの辞書で調べてみても，このような概念は意義特徴として含まれてはいない。やはり日本語の場合と同様，この意義特徴は ojo のものではなくて ojo del huracán のものであろう。また，慣用句である ojo del huracán が ojo の語義のなかの形状の意義特徴の用例として含まれていないところからすると，この慣用句の成立には，ojo の基本義の，形状ではない意義特徴が関与しているはずである。さらに，ojo の多義の構造を検討した結果，その基本義のなかに〈発光体〉というような機能の意義特徴が含まれているとすると説明しやすい語義があった。それゆえ筆者は，ojo の基本義のなかにこのような機能の意義特徴の存在を仮定することにした。

4. むすびにかえて

本稿は〈台風の目〉という概念に対応する日西両語の表現（慣用句）について共時的･通時的に調査して比較し，日本語とスペイン語に上記第 3 章で列挙したような相似点と相違点のあることが判明した。しかしながら，筆者にはさらに深く論証するための資料が不足している。スペイン語学を中心にして研究している筆者には，問題の検討のごく浅い段階でしか論証することができなかった。新たな資料が入手できて新知見が見出されたときには，またその段階で報告することにする。

付記　このテーマを検討する初期の段階に，京都大学理学研究科の余田成男（ヨデン シゲオ）先生から適切なアドバイスを頂いた。日本語関係の資料の大半は，気象庁予報部予報課太平洋台風センターの羽田純（ハダ ジュン）氏にお教え頂いた。京都産業大学外国語学部の同僚であ

る平塚徹氏からも有益な指摘を受けた。また資料の検索などで京都産業大学図書館と大阪大学外国語学部の図書館にお世話になり，京都大学のいくつかの図書館には貴重な資料の閲覧の便宜をはかって頂いた。記して感謝申し上げる。

注

1）本稿では，参照した辞書やコーパスを参考文献のなかでまとめてその末部に掲載し，本文ではその左端に並べた略語を使って指す。

2）この両者において，同様の意義特徴に関連する用例として「うおの目」が出されている。この表現は人間の視覚器官の形状との類似というよりも，魚類の視覚器官そのものの形状との類似で拡張した語句ではなかろうか。なお，本稿で採用されている多義語の意味構造の分析に関する用語については，三好（2008, 2009a）を参照されたい。

3）〈動きの中心にある〉という意義特徴の用例のなかに「騒動の目」が入っている。ということは，この用法が一般的であると判断されるほど使用されているはずであるが，「朝日新聞」，「読売新聞 A」，「毎日新聞」のコーパスでは 1 件も拾えない。当てられるべき漢字は「（騒動の）芽」であろう。これならば，「朝日新聞」では出てこないが，「読売新聞 A」には 3 件（2000，2006，2008），毎日では 2 件（1994，1995）出ている。なお，「広辞苑」の見出し語「芽」の子見出しである「―が出る」の記述のところで，「目が出る」という表記の存在も紹介されている。「芽」が「目」と書かれる可能性を否定することはできないものの，「広辞苑」の当該の記述は不可解である。

4）ここ 20 年以内に出版されたもので，筆者が参照したものに限った。

5）さいころの「目」は黒いことが多いことを考慮すれば，「目」が点のようなものという認知の仕方では，俗にいう「黒目」（眼球の中央の円く黒い部分，瞳，瞳孔）に注意が向けられているのであろう。

6）「東京古語」でも「目」の形状からの拡張義と解釈できる語義して 2 種類挙げてある。「（物と物との）すき間。編み目」と「さいころの目。賽（さい）の目」である。

7）江戸時代の化粧法には「眼の大なるを細く見する伝」まであったようである（久下：494）。しかし現在の日本語話者には，まぶたなどに囲まれた眼球部分が「丸い目」と呼ばれても違和感はない。日本語の言語体系内で認められる伝統的な形状と現在の常識的な形状との間にズレが生じていることになる。日本のマンガの登場人物には丸い目が多いが，木村尚三郎（141）によれば，「鉄腕アトム」の手塚治虫が自身の作品をたずさえてアメリカ合衆国に渡ったとき，「アニメの主人公の目をどうしてそんなに大きく描くのか，日本人の目は小さいのに，とアメリカ人からしきりに不思議がられた」そうである。

8）「三番め」，「厚め」，「控えめ」などのように接尾語として使われる場合の意味の拡張の仕組みについては，森田良行（483-6）が明解に説明している。なお，「広辞苑」（第 5 版）では，「目」の名詞の語義の 4 番が「点状のもの」となっているものの，その下位語義の 4 番が「一列に並んだ（線状の）凸凹やすきま」となっていて，そこに「のこぎりの―」「櫛の―」という用例が提示されている。

9）「金的」という訳語は松田の『リーダーズ英和辞典』による。しかし「雄牛の目」は黒である。なお，日本語で〈物・動きの中心にあるもの〉という意味で「目」が使われるとすると，まず考えられるのは，弓道などの的（まと）であるが，それは普通，表面に黒い円い輪を描いて，輪は漢字の「眼」（マナコ）を使って大眼・小眼と呼ばれているものの，その中央にある塗りつぶしの部分は黒圏（コッケン）と呼ばれている。それは目でも眼でもない。アーチェリーの的も同心円の真ん中のものは「中心（スポット）」，「黒点」と呼ばれている。「目」とは呼ばれていないようである。

10）OED の引用する用例は 1884 年の科学雑誌 “Science”, Vol. 3 の 63 頁にある 1 文だが，原典を見てみると，それは船乗りたちの嵐の避け方に関する記事の一部である（“and there is then observed the peculiar and dreadful calm within the whirl, to which sailors have given the name of ‘the eye of the storm’.”）。「台風の目」は「主として洋上でのみ見られる現象」（大谷 103）であるから，まず船乗りたちが命名した

のであろう。

11）Okada（1922）と Ballou（1892）。

12）「台風」はかつて，「颶風」とも「颱風」とも書かれており，当用漢字が採用されてからは「台風」と書かれるようになった（大谷 57）。岡田（1908：26）では一番強い風が「颶風」となっているが，このように「台風」を定義して用いたのは岡田が始めてである，とされている（大谷 59）。

13）饒村によれば，記録のうえでの熱帯性低気圧への最初の観測飛行は 1943 年にアメリカで（35），レーダーによる熱帯性低気圧の中心部（眼）の最初の確認は 1944 年にアメリカで（44）行われたそうである。また，この気象の構造が直接第三者の目で見られるようになったのは 1960 年にアメリカが初の気象観測衛星を打ち上げてからである（57）。

14）2009 年 8 月 3 日現在で国立情報学研究所の論文情報ナビゲータによれば，「台風眼」がキーワードとして使われている論文が 9 本ある。

15）“un pobre buque de vela, en el centro del huracán, no es más que un tonel, sin gobierno de ninguna clase.”

16）検索結果の画面では 67 casos となっているが，concordancias の画面には 65 例しか現れない。

17）文字通りの〈台風の目〉を意味しているのが 3 例あった。Párrafo の 10（〈台風の目〉の静けさ），51（衛星から観測される〈台風の目〉そのもの），59（〈台風の目〉の後に続く暴風雨）である。

18）この 1 例は 274 例のうちの 176 番目で，“Al día siguiente los pilotos nos enseñaron fotos del avión y del huracán y, realmente, parecía que habíamos pasado condenadamente cerca del ojo del mismo”.（Feo, Julio (1993), *Aquellos años*, pág. 434）である。

19）Beigbeder によると，英語の eye of the storm には，スペインの専門用語では centro del ciclón; centro de la tormenta; vórtice de la tempestad が対応している。

20. 多いのはペルーの 8 例，アルゼンチンの 7 例である。

21）CREA のこのデータから，tormenta の南北アメリカ・スペイン語的特徴があるかもしれないと思われたが，現在の筆者にはそのような傾向に関する資料は見つかっていない。気づかれた唯一のデータは Haensch, 2000a（見出し語 boca のなかの子見出し）にあるが，それは，アルゼンチンでは boca de tormenta という慣用句が「（道路に設置されている）雨水の吸い込み口」の意味で使われている，という点である。ちなみにスペインでは，tormenta には tempestad と同じ語義（「嵐，時化，暴風雨」）があるものの，農村が被る天災などの意味を表現するには前者しか使えないそうである（「モリネル」2905）。なお，tormenta と tempestad の違いであるが，「アギラル」の見出し語 tempestad の記述に “Tormenta grande, esp. marina, en que los vientos alcanzan 90 km por hora” とあるところを見ると，tempestad は主として海上の暴風雨を指すのであろう。そうであれば上記の「モリネル」（2905）の指摘の理由も納得できる。

22）転記は文字の ese alta 以外は原典に従った。なお，牛島の抄訳にはこの部分が含まれていない。それにしても，OED は用例として原典がスペイン語の書籍の翻訳版の記述を採用している。驚きである。OED の編集方針を細かく調べてはいないが，他言語からの翻訳本に含まれる用例を採用すれば，結果としてその辞書には英語と異なる用法が含まれることになるのではなかろうか。

23）本稿の 2.1.2. 項で紹介した「アカデミア」の定義のなかにある「空の青さが見える」ver el azul del cielo という表現（2.1.3. では M. Alonso や Alvar も ojo de la tempestad の定義で使っている）や，慣用句として扱うのには無理がありそうな ojo de la tempestad（2.1.3.）という語句は，2.2.2. で引用されている Arcimis の記述から引用された可能性もある。

24）英語でも eye の基本義の意義特徴のなかに〈発光体〉という概念が含まれている可能性がある。本文で紹介した OED の見出し語 eye の 16. a. の語義は “A central mass; the brightest spot or centre (of light).” であるし，つづく 16. d. は “The bright red spot observed through the mica- or glass-covered sight hole of a blast furnace.” である。さらに，使用地域や年代のデータには欠けるものの英語の方言的用法のなかには a light eye という語句が “a break in the clouds” という意味で使われているからである（Wright, 271）。eye の基本義の意義特徴のなかに〈発光体〉という概念が含まれていることは，俗語ではあるが英語の lamps が「両目」の意味で使われていることからも確認できる（OED; Stein, 804 など）。

25）この語句の原義は 2 番目の語義であり，それから換喩で拡張したのが語義 1 であろう。

26）とくに本稿の 2.1.1. 項で紹介した「クラベ」と J. I. Alonso が問題になる。

参考文献

牛島 → Jorge Juan y Antonio de Ulloa（1748）.

大谷東平（1955）『台風の話』，岩波書店。

岡田武松（1908）『気象學講話』東京（増補 3 版 1913，増補 4 版 1916）。

岡田武松（1935）『気象学』改稿第 2 版，下巻，岩波書店。

木村尚三郎（1988）『随想　ヨーロッパの窓から』，講談社。

久下司（クゲ ツカサ）（1993）『日本化粧文化史の研究』，株式会社紫紅社。

饒村曜（ニョウムラ ヨウ）（1986）『台風物語』，日本気象協会。

松田徳一郎（監）（1993）『リーダーズ英和辞典』，研究社。

三好準之助（2008）「語彙の対照研究のための多義構造の記述モデル」，京都産業大学論集，人文科学系列，第 38 号，1-33。

三好準之助（2009a）「多義構造の分析モデルの修正と応用」，京都産業大学論集，人文科学系列，第 40 号，223-240。

三好準之助（2009b）「多義語『目』と ‘ojo’ の日西対照研究」，日本イスパニヤ学会「イスパニカ」第 53 号，41-60。

森田良行（1980）『基礎日本語 2』，角川書店。

Alonso, Juan Ignacio（2000）, *Diccionario de la lengua española*, Espasa-Calpe, Madrid.

Alonso, Martín（1947）, *Enciclopedia del idioma*, Aguilar, Madrid.

Alvar Ezquerra, M.（1995）, *VOX Diccionario manual ilustrado de la lengua española*, Biblograf, Barcelona.

Arcimis, Augusto（1900?）, *Meteorología*, Calpe, Madrid–Barcelona.

Ballou, S. M.（1892）, “The Eye of the Storm”, *Journal of the American Meteorological Society*, 6, 67-84, 121-127.

Beigbeder Atienza, Federico（1988）, *Nuevo diccionario politécnico de las lenguas española e inglesa*, Ediciones Díaz de Santos, Madrid.

Gómez de Silva, Guido（2001）, *Diccionario breve de mexicanismos*, Academia Mexicana y Fondo de Cultura Económica, Ciudad de México.

Gutiérrez Cuadrado, Juan（dir.）（1996）, *Diccionario SALAMANCA de la lengua española*, Santillana y Universidad de Salamanca, Madrid.

Haensch, Günther y Reinhold Werner（1993）, *Nuevo diccionario de americanismos. Tomo III, nuevo diccionario de uruguayismos*, Santafé de Bogotá, Instituto Caro y Cuervo.

Haensch, Günther y Reinhold Werner（2000a）, *Diccionario del español de Argentina*, Gredos, Madrid.

Haensch, Günther y Reinhold Werner（2000b）, *Diccionario del español de Cuba*, Madrid, Gredos.

Juan, Jorge y Antonio de Ulloa（1748）, *Relación histórica del viage a la América Meridional hecho de Orden de S. Mag. para medir algunos grados de meridiano terrestre, y venir por ellos en conocimiento de la verdadera Figura, y Magnitud de la Tierra, con otras varias Observaciones Astronómicas, y Phísicas*, impressa de orden del Rey Nuestro Señor en Madrid por Antonio Marín（ed. facsímil: Merino Navarro, José P. & Miguel M. Prodríguez San Vicente（1978）, *Relación histórica del viage a la América Meridional*, Fundación Universitaria Española, Madrid）. 日本語への抄訳は牛島信明・増田義郎（1991）『南米諸王国紀行』岩波書店。

Kany, Charles E.（1960a）, *American-Spanish Semantics*, Berkeley y Los Angeles, Univ. of California Press.

Lucena Cayuela, Núria（2002）, *Diccionario de uso del español de América y España*, Spes Editorial, Barcelona.

Maldonado González, Concepción（1997）, *CLAVE. Diccionario de uso del español actual*, Ediciones SM, Madrid.

Miyoshi, Jun-nosuke（2009）, “Una interpretación cognitiva sobre la locución ‘*ojo*（*s*）*de jabón*’”, en *Lingüística Hispánica*, Vol. 31, 69-79.

Moliner, María（2007）, *Diccionario de uso del español*, 3.ª ed.,Gredos, Madrid.
Morales Pettorino, Félix et al., *Diccionario ejemplificado de chilenismos y de otros usos diferenciales del español de Chile*, tomo I（A-Caz）, 1984; tomo II（CC-Grup）, 1985; tomo III（Gua-Peq）, 1986; tomo IV（Per-Z, Suplemento y Bibliografía）, 1987; Academia Superior de Ciencias Pedagógicas de Valparaíso, Valparaíso.
Okada, T.（1922）, "On the Eye of the Storm", *The Memoirs of the Imperial Marine Observatory,* Tokyo, 1, 27-36.
RAE（1726）, *Diccionario de Autoridades. O-Z*（edición facsímil, Gredos, Madrid, 1969）.
Real Academia Española（2001）, *Diccionario de la lengua española*, 22.ª ed., Madrid（1992, 21.ª ed.; 1956, 18.ª ed.）.
Rosenblat, Ángel（1969）, *Buenas y malas palabras en el castellano de Venezuela*, I, II, III y IV, Caracas-Madrid, Editorial Mediterráneo.
Seco, Manuel et al.（1999）, *Diccionario del español actual*, Aguilar, Madrid.
Stein, Jess（ed.）（1966）, *The Random House Dictionary of the English Language*, New York.
Wright, Joseph（1900）, *The English Dialect Dictionary*, Vol. II. D-G, Henry Frowde, Amen Corner, E.C., London.

参照した言語コーパス
朝日新聞－「聞蔵Ⅱビジュアル」（京都産業大学図書館）。
読売新聞 A －「ヨミダス歴史館」（京都産業大学図書館）。
読売新聞 B －「明治・大正・昭和の讀賣新聞」CDR データベース（大阪大学付属図書館）。
毎日新聞－「毎日 News パック」（京都産業大学図書館）。
CORDE: Banco de datos: Corpus diacrónico del Español. http://corpus.rae.es/cordenet.html（consultado en diciembre de 2008 hasta abril de 2009）.
CREA: Banco de datos: Corpus de Referencia del Español Actual. http://corpus.rae.es/creanet.html（consultado en diciembre de 2008 hasta abril de 2009）.

主として参照した辞典（引用では左端の略語を使用。編者などは省略）
アカデミア ‐ Real Academia Española（2001）.
アギラル ‐ Seco, Manuel et al.（1999）.
岩波国語－『岩波 国語辞典』，初版 1963，第 2 版 1971，第 3 版 1979，第 4 版 1986，第 5 版 1994，第 6 版 2000。
旺文社国語－『旺文社 国語辞典』，第 10 版 2005。
旺文社古語－『旺文社 古語辞典』，第 9 版 2001。
学研国語－『学研 現代標準国語辞典』，2001。
クラベ ‐ Maldonado González, Concepción（dir.）（1997）.
現代国語－『現代国語例解辞典』，第 4 版 2006，小学館。
言林－『言林』（新版），1961，小学館。
広辞苑－『広辞苑』，初版 1955，第 2 版 1969，第 3 版 1983，第 4 版 1991，第 5 版 1998，第 6 版 2008，岩波書店。
講談社日本語－『講談社カラー版 日本語大辞典』，第 2 版 1995。
サラマンカ ‐ Gutiérrez Cuadrado, Juan（dir.）（1996）.
集英社国語－『集英社 国語辞典』，第 1 版 1993。
新明解－『新明解国語辞典』，第 6 版 2005，三省堂。
大辞林－『大辞林』，第 3 版，2006，三省堂。
東京古語－『最新全訳古語辞典』，2006，東京書籍。
日国－『日国オンライン』（日本大辞典刊行会『日本国語大辞典』，第 2 版 2000 の Web 版）。
明鏡－『明鏡 国語辞典』，2002，大修館書店。

モリネル - Moliner, María（2007）.
ラルース - Lucena Cayuela, Núria（2001）.
例解新国語－『例解 新国語辞典』, 第 6 版 2003, 三省堂。
ODE － Soanes, C. et al.（ed.）（2003）, *Oxford Dictionary of English*, 2nd edition, Oxford University Press.
OED － Oxford University Press（2002）, *Oxford English Dictionary*, 2nd edition on CD-Rom version 3.0.

Japanese-Spanish Comparative Study on the Corresponding Words to the Notion of 'Eye of the Storm'

Jun-nosuke MIYOSHI

Abstract

This article is a part of the Japanese-Spanish Comparative Study on the corresponding words to the notion of the "eye" as an organ of sight, ME and 'ojo'. Both languages have their corresponding words to the notion of 'eye of the storm', TAIHUU-NO-ME and 'ojo del huracán'. This paper traces the process of their formation, and reports on the several interesting points clarified through this research.

（1） On the corresponding words: Not only in Japan but also in Spain the knowledge on the meteorological phenomenon of 'eye of the storm' was introduced at the beginning of the 20th century, and their corresponding technical words, TAIHUU-GAN and 'ojo de la tempestad', began to be used. Later, from the seventies of the same century, their corresponding popular words, TAIHUU-NO-ME and 'ojo del huracán' began to be used.

（2）On the technical words: The Japanese one might have been influenced by the English meteorological term, and the Spanish one was originally one of the technical words of Spanish Sailors.

（3）On the semantic features of the organ of sight and the same of the corresponding words: In Japanese the ME of the idiom TAIHUU-NO-ME can be related to one of the semantic features of the shape of ME, 'shape just like a point'. Also there are several dictionaries of Japanese language which present us the notion of 'occupying the central part' as one of the semantic features of ME, citing TAIHUU-NO-ME as an example. But it is impossible for us to find this notion among the traditionally admitted semantic features of ME, and we judge that this semantic feature belongs to the idiom itself. On the other hand, in Spanish also, we find several dictionaries of this language which present us the notion of 'occupying the central part' as one of the semantic features of 'ojo', citing 'ojo del huracán' as an example, but we cannot find this meaning among the semantic features of 'ojo'. Our judgment on this Spanish semantic feature is the same as that on the Japanese one, and moreover we suppose that the formation of the Spanish idiom, 'ojo del huracán', has much to do with a certain hypothetical semantic feature of the function of 'ojo', that is, 'luminary'.

Keywords : ME, ojo, TAIHUU-NO-ME, ojo del huracán, semantic feature